

関連文化財群 4 野川の清流に育まれた地場産業

関連文化財群の概要	
長井市域では、古くから、豊富な水を利用した産業が発達し、特に、平野・西根地区を中心に、稲作が中心となる産業となりました。その他にも、野川の清流を利用した養蚕や繊維産業は、近代以降、主力産業となりました。現代では、金属加工や精密部品製造などの製造業が盛んです。	
関連文化財群の内容	
長井市域は、主要河川である最上川※1、白川※2、野川※3が流下する水が豊富な地域で、古くから豊富な水を利用した産業が多く発達しました。長井市域では、とりわけ野川の影響が大きいと考えられます。 近世以前は、主要な産業は稲作を中心とする農業でしたが、これは、水が豊富という理由のほかに、主要河川が氾濫を繰り返すことで、収穫がない年がある代わりに、肥沃な土壌が供給されたことによります。 室町時代後半にこの地を治めた伊達氏は、天正 19 年（1591）の岩出山転封に際し、単位面積当たりの収量の多い下長井（現在の長井市、飯豊町、白鷹町と川西町の一部）を手放すことに抵抗したとも言われています。 江戸時代に入っても、稲作は地場産業の中心となっていました。これは、域内での食用はもとより、幕府などへ納める貢租を米で換算するという石高制に由来します。 そのほか、麻布の材料となる青苧の栽培も盛んに行われていました。青苧は、通常の亜麻よりも繊維が強く、織上りがしなやかという特徴があるため、高値で取引されました。また、青苧は、繊維採取に大量の水を必要とすることから、長井市域の豊富な水が役立っていました。 米沢藩の直轄で運営された中央地区宮の宮船場※4には上米蔵（年貢米を貯蔵する蔵）がありましたが、近隣には青苧蔵※5もあり、この二品目が米沢藩の主要な移出品だったことが分かります。 元禄以降、平和な時代が続くと、庶民の一部（富裕層）も安価な木綿だけでなく、高価な正絹も使うようになりました。これを受け、江戸時代中期以降には長井市域でも、絹製品の原料となる養蚕が盛んに行われるようになりました。米沢藩第 9 代藩主である上杉治憲（鷹山）は、役木として藩内に蚕の餌になるクワ※6、ろうそくの原料となるウルシ、和紙の原料となるコウゾをそれぞれ百万本植	
	
写真 35 青苧門	写真 36 五十川の桑樹



写真 37 長井紬

えさせたとの記録があります。これは、累積した借財で困窮していた米沢藩の財政立て直しの一環として養蚕と漆蠟製造、和紙製造を奨励したもので、これらは藩の重要な収入源となりました。

養蚕に関しては、当時、絹製品は中国産が主流となっていたましたが、輸入制限等の影響で国産化が進むと、その原料としての養蚕が奨励され、長井市域でも盛んに行われました。また、生産した繭玉から生糸を紡ぐ製糸や、機織りで絹布を生産すること（長井市域では主に紬織）も農家の冬仕事として行われるようになると、単に原料の出荷に留まらず、より付加価値の高い製品としての出荷も行われるようになっていきました。

紬織に関連して、染織も行われました。紬織では、初めは主に括り染めや板締めという手法による先染めで縞縞が織られていましたが、後には型染による製品も多く作られています。

染織は、その工程上、大量の清冽な水が必要で、域内に小河川の多い長井市域は、染織には絶好の立地でありました。

漆蠟^{うるしろう}は、ウルシの実から蠟を抽出するもので、主にろうそく^{はぜろう}として出荷されました。漆蠟は、収穫量の多い樺蠟（ハゼの実

から抽出した蠟）が広まるまでは、貴重な照明として広く流通しました。米沢藩の漆蠟は、質の良い特産品として高値で取引されたといわれています。

コウゾは、その繊維部分が和紙の原材料となるもので、和紙として出荷するものと繊維部分を乾燥させ原料として出荷するものがありました。

明治時代は、新政府の国是である富国強兵のため、国を挙げて特産品の海外輸出を奨励しました。これを受け、いち早く貿易港として開港した横浜港には、日本中の特産品が運ばれ、特に絹製品の輸出が好調となりました。

長井市域においては、養蚕業が発展したことにより、蚕種、繭はもちろん、生糸の生産も拡大しました。また、紬織も先進地から指導者を招聘するなどして改良が重ねられ、個人での生産から工場生産が主流となるなど、大いに発展しました。置賜地域の紬織は、米沢、長井、白鷹で盛んだったことから、当初は、それぞれに米沢紬、**長井紬**^{※7}、白鷹紬（白鷹御召とも）と称していましたが、昭和 51 年（1976）には、長井紬・米沢紬・白鷹紬が「置賜紬」として通商産業大臣（当時）指定伝統的工芸品の指定を受けています。

大正 3 年（1914）、赤湯から長井に至る長井軽便鉄道が中央地区宮の栄町に建設された長井駅まで開通すると、陸路による重量物の運搬が容易となり、長井駅付近に郡是製絲（現グンゼ）長井工場が誘致されるなど、再度、養蚕を含めた織物製造が盛んになりました。しかし、長井市域には郡是製絲長井工場以外に大規模な絹織物製造工場がなかったため、新潟や長野の大規模工場で作成される安価で高品質な製品に徐々に押されていきました。

昭和時代に入っても、長井市域における主力産業は養蚕と繊維産業でした。しかしこの頃には、繊維産業は輸出中心となっていました。世界恐慌の煽りを受けて繊維価格が暴落すると、地場の繊維産業も大打撃を受け、徐々に衰退しました。現在も操業している織元では、伝統を継承しつつも、独自の製品開発や販路の拡大を図っています。

昭和 17 年（1942）、宮地区西側に位置する幸町に**東京芝浦電気（現東芝）長井工場**^{※8}が誘致・創業され、さらに昭和 21 年（1946）には全購連製薬工場（現協同薬品工業）が設立されるなど、長井は製造業を基盤にした経済発展がみられました。

戦後の高度成長期に入ると、長井市域は、東芝などの大手製造業の下請け工場や関連業種が多く、いわゆる企業城下町になりました。中でも、電子部品製造や精密金属加工、金型加工は、現在でも長

井市域の製造業の主力部門となっています。

これら、いずれの製品製造にも大量の水が必要不可欠で、水が豊富なこの地だからこそその立地であったといえることができます。

このように、野川の水は、農業を始めとする多くの産業に恵みをもたらしています。

構成文化財一覧

No.	名称	種類	指定等の状況
1	最上川	文化的景観（重要な構成要素）	市特定
2	白川	記念物（名勝地）	未指定
3	野川	記念物（名勝地）	未指定
4	宮船場跡	記念物（名勝地）	未指定
5	青芋門	有形文化財（建造物）	未指定
6	五十川の桑樹	記念物（植物）	市指定
7	長井紬	民俗文化財（無形の民俗文化財）	未指定
8	東京芝浦電気長井工場	有形文化財（建造物）	未指定

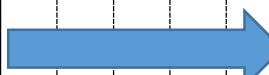
課題

- ・ 中世までの情報が少なく、当時の地場産業の動向を具体的に明らかにできない。
- ・ 青芋や養蚕、紬織など、近世から近代にかけて隆盛した地場産業が衰退し、長井紬などの伝統文化の後継者（無形文化財等の候補）が十分に育っていない。

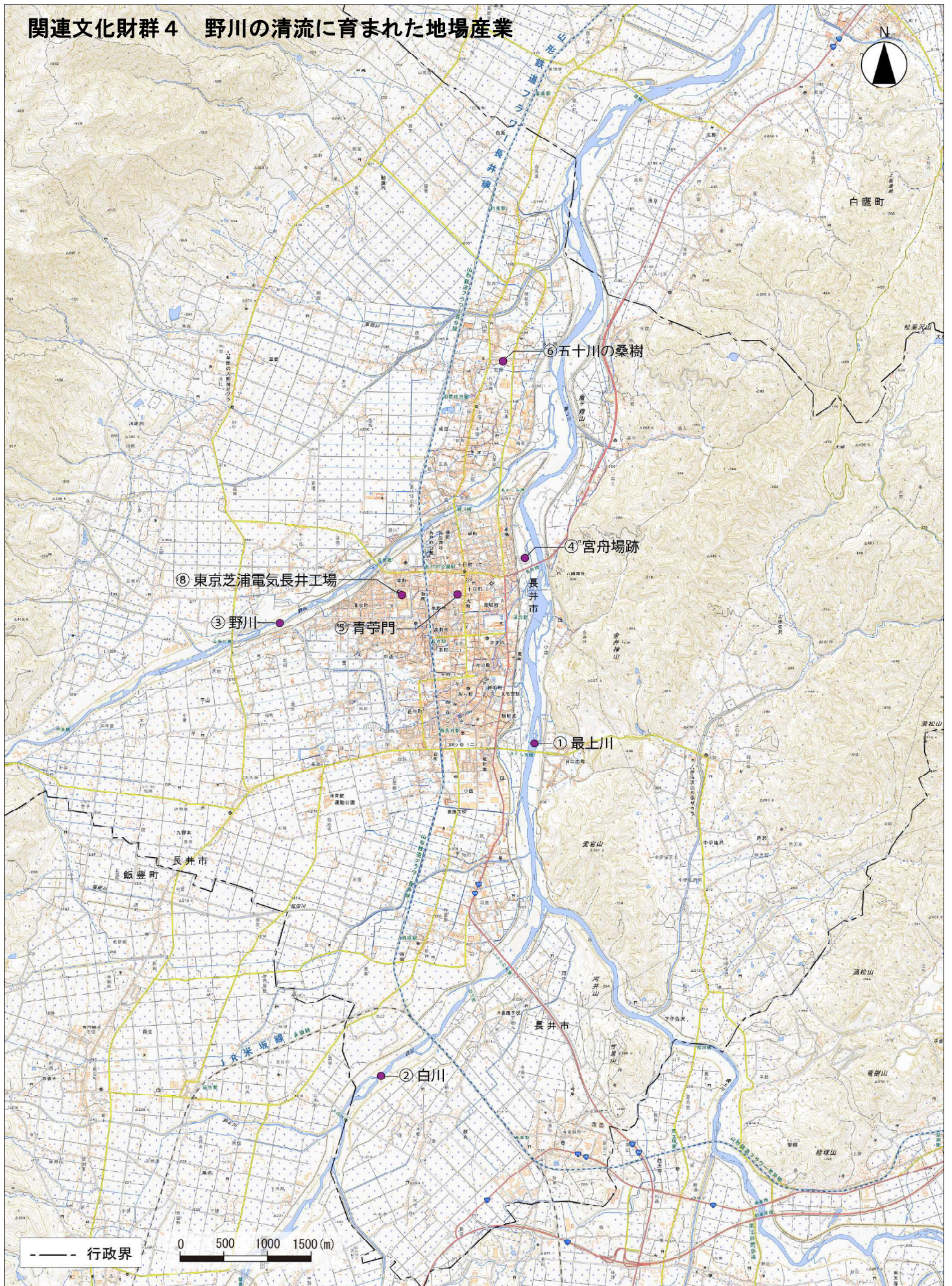
方針

- ①専門的な機関等との連携を図り、地場産業の情報量の少ない時代（主に中世）の文化財の詳細調査を進める。
- ②無形文化財等（未指定を含む）の後継者の確保を進める。

措置

第5章 対応 No	事業名等	事業内容	継続 拡充 新規	事業主体						令和 8 年度	令和 9 年度	令和 10 年度	令和 11 年度	令和 12 年度
				市民 等	文化 財の 所有者	関連 団体	学校 等	学識 者	市					
3	未指定文化財の 調査推進 (方針①)	文化財を適切に管理し、次 世代に伝えるため、指定文 化財候補の掘り起こしと 詳細調査の実施を進める。	継続	●	●	●	●	●	●					
15	文化財後継者相 談事業 (方針②)	文化財（未指定を含む）の 所有者やその関係者から 保存継承や維持管理等に 関する相談を受け、助言等 を行う。	新規		●	●		●	●					検 討
19	文化財調査事業 (方針①)	調査が不十分な文化財や、 文化財未調査地域につい て、専門家の協力を得なが ら調査を進める。	継続					●	●					
28	大学等との連携 推進事業 (方針①)	市内の文化財等について、 大学等の研究機関と連携 し、調査研究を進める。	新規					●	●					検 討

関連文化財群 4 野川の清流に育まれた地場産業



※「⑦長井紬」は場所の特定が困難なため図より除く